

## 内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名前：須賀 亜衣子（すが あいこ）
- (2) 年齢：50 歳
- (3) 参加事業：第 4 回「国際青年育成交流事業」（ジョルダン）（1997 年）
- (4) 職業：エムスリー株式会社 執行役員 人事グループ・グループリーダー



### ■ 応募のきっかけ

中東地域に興味があり、渡航先にヨルダンが含まれていたことがきっかけです。私は、高校卒業後アメリカに留学し、Political Science(政治科学)を専攻、国際安全保障、軍事戦略、戦争論などを学び外国語としてアラビア語を選択していました。ですから留学時代から、**アラブ・イスラム文化圏での実滞在経験**を希望していました。当時行きたかったアルジェリア、レバノンは当時政情不安定で、旅行会社から「今行くのはおすすめできない」と言われ、また交換留学の制度があったシリアにも取得可能単位超過で行けませんでした。大学卒業後、アメリカで就職したのですが、日本でしかできないことがしたいと帰国、国家公務員試験の受験も考え東京大学に学士編入しました。その頃、内閣府の国際交流事業のポスターを区役所かどこかで見て、当事業について知ったと記憶しています。青年派遣の国の一つに中東のヨルダンが含まれており「これだ！」と胸が躍ったのを覚えています。チラシを持ち帰り、両親と「きちんと納税してきたけれど、国が実施するこのような事業に参加したことは一度もないし申し込んでみたい」と話して応募を決めました。当時の国際青年育成交流事業では、訪問国が 8 か国あり、第 1 希望から第 3 希望までを記入するようになっていました。ヨルダンを第 1 希望として応募しました。

### 事業参加経験のうち、特に人生に影響を与えたのはどんなことですか。

「地球人」コスモポリタンでありたいと思い、グローバル企業に就職する一因になったことです。

ヨルダンへ派遣される前の事前研修で、現地の基礎知識を改めて学びました。ヨルダンの人口は約 300 万人で、そのうちベドウィン（アラブ系の遊牧民族）が約 20 万人。また、人口の約 45%はパレスチナ人、90%はイスラム教徒で、マイリティとしてキリスト教徒が 10%ほど。日本の人口の 4 分の 1 くらいのヨルダンの中にも、生活様式や信仰している宗教などに違いがあり、様々な人々がいる、多様性があることを再認識しました。実際に現地でヨルダン人家庭にホームステイをしたり、青年海外協力隊の隊員宅にも滞在し、活動現場に連れて行ってもらったりするなど、現地の人々の気質やカルチャーを知る、環境にどっぷりと浸かるイマージョン（immersion）ができました。数々の体験の中で、ヨルダンと日本は全く異なる国であるものの、ヨルダン人にも日本人の「義理人情」に近い情緒があり、実は日本と共通点も多いと感じたのを覚えています。宗教や肌の色、地理的な距離に注目していると、両者の違いのみが強調されてしまいがちですが、人間として触れ合うと理解し合える近しい存在になれると感じました。**これは本や教室では得られない体験**でした。

私は日本で生まれ育ち、アメリカに留学し欧米の資本主義的な考え方や思想を学び、そのカルチャーに慣れ親しんだため「勤勉が大事」という考え方を普通に持っていました。そんな私にとって、特に渡航後すぐは、ヨルダンでは「勤勉」が重視されていない、と違和感を覚えました。例えば、ヨルダンでは朝から座ってコーヒー飲みながらの井戸端会議が町のいたるところで見られ、昼休みも長い。そして午後 3 時頃には仕事が終わりと、皆、帰宅。ヨルダンの人々は一体いつ仕事をしているのだらうと思ったものです。ところが、夕方、涼しくなってからマーケットに出かけて行くと、店は開いており、活気に溢れていて、私たちも店主と交渉しながら買い物をしました。こうした日々を過ごす中で、豊かさとか人生の要素の優先順位が、国によって異なることを実感しました。将来、もっと**多様なことに対しオープンであることが求められる時代**になるだ

ろうと思っていましたし、自分は多様性を受容できる人間でありたいとより強く願うようにもなりました。これはヨルダンで何か特定の出来事があった、はっと気付かされたわけではありません。ヨルダンで過ごした日々により、日本で育ちアメリカで受けた教育や影響の上に生まれた気付きだったと思います。

また、**事の良し悪しや是非はコンテキストによる**ということも学びました。例えば、イスラム教徒でない人たちは、「ラマダンの断食なんてなぜやるのだろう？」と思うかもしれません。人間が食料や水がなく過酷な乾燥環境で生きるためには、暑い日中はゆっくり過ごし、体力を温存する必要があります。ラマダンは、厳しい環境下で活動できるだけの体力があること、食べ物や水があることの大切さや有り難さを学ぶきっかけとなっている。暑い昼間にゆっくりしているからこそ、日が落ちて涼しい時間帯に活動ができる。一概に怠惰であるとか、おかしな考えに基づいて行動しているわけではない。そのような生きるすべが必要な地域、環境であるからこそ、そのような生き方をしている。宗教や文化の背景にはそれぞれに与えられた環境要因がある。自分には異質に見えることも、その背景を知れば、その行動の意味や実用性に気付くことができる。実際に現地に滞在しイマージョンをしてみてもコンテキストの重要性を初めて実感することができました。

日本では、公務員よりも民間企業で働いている人の方が圧倒的に多いのに対し、ヨルダンでは国家公務員がとても多かったのも印象的でした。社会に出たら、絶えず成長することが求められ、生産性が重視されるもの。一方、ヨルダンでは人々がその対極にいるかのように見え、なぜもっと生産的なことをしないのだろうと疑問に思ったことを覚えています。でも、彼らは決して怠惰なわけではなく、ヨルダンという厳しい自然環境の中で、人間として生命を続けていくことに重きを置くと、必然的にあのような働き方にならざるをえないのではないか、と思うようになりました。

公務員試験受験も考えアメリカから帰国し法学部でも学んだのですが、多種多様な人が織りなす環境の中に身をおきたいと思うようになり、マルチカルチャルやグローバルな企業でのキャリア経験を積むことになりました。

### キャリア形成に影響を与えた具体的なエピソードがありますか。

青年省訪問や青年省職員との交流から、日本の税金や ODA がもたらしたインパクトは簡単には測れないことも実感しました。また、**持続可能な発展への貢献は「Give」だけでは不可能で、如何にして現地の方にオーナーシップを持ってもらうのが重要であることを認識**しました。

当時、ヨルダンは日本を含め様々な国から援助を受けていました。日本も学校を建てたり、遺跡の調査をしたり、私たちが視察した「日本・ヨルダン肥料株式会社」を支援していました。この肥料会社は、日本・ヨルダン間の初の合弁会社で、5名の日本からの派遣技術者の他は、従業員の大半がヨルダン人でした。様々な国からいつも支援があり、援助に慣れているからか、「ヘルプが必要」という言葉を様々な組織のヨルダン人職員や従業員から聞きました。「これまでにない新しいものを作ってみよう」「さらに発展するには自分たちは何をすればよいか」といった自発性は残念ながらあまり感じられませんでした。外部からの経済的援助がなくなれば、活動が停止しかねない、と危惧されました。援助が「援助慣れ」を作り出し、持続可能な発展を遂げるために必要な自主性、自発性が培われていないのであれば援助の意味がないように感じました。

ヨルダン滞在中、団員一人一人が青年海外協力隊の隊員宅に滞在するプログラムがありました。私はマアンという町の知的障害者学校で支援活動をしている隊員と寝食を共にし、その現場にも同行させていただきました。隊員からは現地の人に仕事をしてもらうのがいかに大変か、「**労働契約自体は労働に対する動機づけにはならない、如何にして動機付けするのがチャレンジ**」と聞き、実際に苦勞されている現状を目の当たりにしました。私はアメリカで大学卒業後、NGO に勤務し、その際「労



青年海外協力隊の活動現場である女子小学校にて（本人最後列中央）

働契約のない」ボランティアの力を活用することのチャレンジは経験していました。一方、国は違えど知的障害者学校の職員は正規に労働義務があるはずで、給与をその対価として受け取っているので、「勤勉は重要」なはずでした。実際、協力隊の活動現場では、「労働の対価」であるはずの給与は権利で、働くのは「自分のモチベーションが高い時だけ」という現状。例えば、「今朝はなぜ遅刻してきたのか」と尋ねると、「お母さんの具合が悪かった」とか「車が動かなかった」とか、とにかく非常に多くの言い訳が職員の口から次から次へと出てくる。契約という概念が日米とは全く異なり、あたかもボランティアであるかのように個々人のモチベーションを掻き立て、人を動かさないといけないと実感しました。

契約は法律の上に成り立ち、法律は文化の土壌の上に成り立つものだと思えながら頭をガンと打たれたショックがありました。生まれ育った日本でも、その後暮らしたアメリカでも、規則正しくルールに従い、時間通りに学校や仕事に行く、残った宿題や仕事は時間を超えてでもやり切る、程度の差はあれどそれが世界の常識だと思い込んでいたんですね。

ところが、毎朝同じ時間に来て、指示されたことをするとか、やるべき事を自分で発見して実行、片付けていくといったことが普通ではない世界がある。このような文化や価値観が異なる世界に、協力隊の隊員が突然入って行って、「常識」で仕事をしようとしても難しい。自分たちが知っている世界を作ろうとしてもそれがなかなかうまくいかないということなのです。先にも述べたように、私はアメリカの大学を卒業した後、現地の NGO で勤務し、ボランティアの方の協力を得て、募金活動などを実施していました。ボランティアの方々には、対価を得るわけでもないのに、各人のグッドウィルで参加し、時間という貴重なリソースを提供してもらいます。ですから、マネジメントはとて大変です。あるイベントでボランティアが 10 人必要だからということで 10 人集めても、当日来てくれるのは 6 人になったりする。ヨルダンの現場で、雇用関係がない中で参加者の動機付けをし、活動していただくことのチャレンジを思い出しました。ヨルダンでは、更に雇用関係があっても難しい、という実情だったのですが……。

こうした体験は、後に勤務したグローバル企業で、様々な宗教や教育的背景、色々な家庭環境で育った人が集まった国際色豊かなプロジェクトチームを組んで仕事をした時に大いに役立ちました。**同じ方針伝達をしても、同じ発言をしても、それに対する反応は同じであるとは限らない、個々人の文化的・社会的背景を念頭に、適切な動機付けや納得感を醸成しなければ物事は進まない、ということを実感したからです。**ヨルダンでの体験は非常に貴重でした。

## ■ 青年省大臣宅でのホームステイ



ホストファミリーと共に（本人右から二人目）

ホームステイは、青年省大臣のお宅でお世話になりました。ヨルダンでの家族・親戚・友人関係、男女の役割分担、年齢に応じた家庭内や社会的な期待値などについて理解し、現在にまで続く貴重な交友関係を得ることができました。

私は大学で「フスハー」と呼ばれる標準アラビア語を学びましたが、ヨルダンや他のアラビア語圏の人にとっては「外国語」のようなもので、彼らも学校で学びます。日常では「アンミーヤ」とよばれる現地方言が話されますが、残念ながら私にはアンミーヤはよく分からず、ホームステイ先の「お母さん」にも、私が話すアラビア語はあまり分からなかったと思います。そんな中、交流するために一緒に家事をしました。家事をしながら、言葉も少しずつ分かり、またいろいろなことも見えてきました。印象的だったのは、明確な男女の役割分担

です。

ヨルダンでは、家回りのことはすべて女性がし、特に主婦は、礼拝をしている時間以外はとにかくずっと家事をする。若い世代や世帯の所得などによる「女性の社会進出」のレベルにもよりますが、少なくともステイ先では完全に「男は外、女は中」でした。朝食準備、朝食の後片付け、掃除、昼食準備、昼食の後片付け、掃除、夕方のお茶、夕食準備、

夕食後片付け、合間に礼拝と雑務……。一方、子供を育て、家庭を支える、その役割に誇りをもち、神のおかげで人生が幸せであると充実感を享受していました。

男性は仕事と社交の役割。それなのに「この程度の勤務時間で帰宅してきてよいのだろうか？」とってしまったことを覚えています。現在「働き方改革」や「ワーク・ライフ・バランス」など、職場の生産性と共に、個人が持続可能で生きがいを感じられる働き方の実現が話題になっています。全体としては国際社会からの援助で成り立っていたということかもしれませんが、働き方や生き方の均衡を考える上での一つの社会事例として記憶に残っています。

興味深いと思ったことは、買い物に行くと、主役であり司令塔は主婦であることと、母親と一緒に買い物に行くのは息子たちであることです。暑い国ですので、買い物は日が暮れてからなのですが、スーク（市場）に行き、あれ買って、これ買ってという母親の指示に言われた通り購入、価格交渉もし、重たい荷物を持つのも全て息子たち。「主従関係」が面白いなと思いました。

もう一つ当時興味深かったのは、娘たちはかなり幼い頃から将来どんな人と結婚することになるのか、が話題の多くを占めていたことです。外国人としてホームステイした私は既に 20 代後半でしたから、結婚に関してどのような意見を持っているか、どんな結婚をしたいと思っているのか、につき興味深々、いろいろ質問をしてきました。当時中学生と大学生だった彼女たちは学業は修めるものの、基本的に求められているのは早い結婚、そして子供を産んで育てることでした。

滞在中は、モスクでの礼拝体験、金曜礼拝後に親戚一同が集まるガーデンパーティ、カードゲームなどをしたり、一家の大黒柱である青年省大臣の話を聞いたりするなど、貴重な体験ができました。

#### 内閣府事業でしか得られない体験、留学とは異なる点とは何だと思いませんか。

行政・外交の一環としての青年交流として、一個人ではなく「**国の代表として**」という良い緊張感を持って臨めること、また国の事業だからこそ相手国の政府機関や王室などとの交流機会が得られること、**相手国からの参画者も同様な気持ちでいるため、その後続く友情が育まれやすいこと**だと思えます。

応募する時点で、国の事業かつ現天皇皇后両陛下、当時の皇太子・皇太子妃殿下のご成婚記念事業であることは理解していました。現地では、日本大使館や青年省の訪問など公式行事を通じ、自分が日本を代表してヨルダンを訪れているということを強く実感しました。そして同行してくれていたヨルダン青年省の方も外国の代表を迎えているという気構えでした。今でも覚えているのが、砂漠を貫くキングスハイウェイをバスで南下していた時のある出来事です。途中で立ち寄った土産屋で店主から暴言を浴びせられたことがありました。バスは出発直前だったのですが、それを知った同行ヨルダン人で青年省の職員の一人が、バスを止め、飛び降りて土産屋に戻り、「この人たちは国がお迎えた日本からのゲストなんだ。そんなことを言うな、謝れ！」と抗議したのです。その怒りと抗議の様子を見て、派遣団が日本の 1.2 億人を代表していること、自分たちも気をつけて発言しなければならないと、責任を感じた瞬間でした。

また、私たちに同行してくれた日本に招へいされたヨルダン青年たちが自国の歴史や文化、ヨルダン人の考え方などを分かりやすく説明してくれたことも事業ならではの得難い経験でした。彼らもヨルダンという国を代表する民間大使という意識を持って事業に参加していたのだと思います。招へい青年であり青年省大臣の息子であるクサイはこの事業に参加したことをきっかけとして、後日、日本に留学しました。筑波大学の学士で 4 年、その後博士課程に進み、現在はヨルダンの大学で教鞭を取っています。先ほど日本の税金や ODA のインパクトについて触れましたが、クサイに関しては、外国人を日本に招いて教育し、その結果、自国に戻って親日的な視点を持ちつつ、自国民を教育しているというモデルケースと言え



アンマンの日本国大使館を訪問（本人前列左）

るでしょう。

私がこの国際交流事業に参加して既に 25 年経ちました。クサイやその家族とは現在 Facebook などできつなっています。私個人の人生・交友関係にも大きなインパクトを与えた事業だったと感じています。

## ■ 事後活動について

内閣府事業に参加したことで様々な巡り合いがありました。そうした巡り合いがあってこそ今の自分があるとの思いが、自分として何が「還元」できるだろうと深く考える一因となりました。そして後年、**日本にいる外国人の永住権取得支援**をしようと思ったきっかけの少なくとも一つになったのではないかと感じています。

私は内閣府事業に参加して様々な人に出会いました。出身地、年齢、学校、職業、考え方やスタイルの異なる参加者 9 名との出会いに恵まれました。今でもクサイを始めとするホームステイ先ファミリーとはつながっています。

また、それ以前にも留学していたアメリカを含め様々な国の様々な人に助けられてここまで来たと感謝しています。社会人になり、世界各国の人々と仕事をしてきました。移民として移住先で働いている人、社内で拠点移動し外国で働いている人もいました。私自身、アメリカに移住する可能性もありました。こうした経験を踏まえ、日本に移住し働いている人たちが必ずしも温かく歓迎されていないと感じている現状を見て、これまで私が受けてきた恩を還元できないかと考えてきました。例えば、日本で就労している外国人の子供たちの支援などです。2019 年のラグビーワールドカップは多くの日本人が感動したと思います。特にジャパンチームの多様性と一致団結した力に。今後も日本が生き残れる国であり続けるには、ラグビーワールドカップ・ジャパンのチームがモデルになると思いました。生まれた国が異なっても、一致団結して課題に立ち向かうチーム。何かの縁で来日し、日本に住みたい、国籍を取得したいと思う人がいたら、永住権取得の支援をしたらどうだろうと思ったのです。ちょうどその頃、縁あって日本での永住を望み、永住権取得にトライしてきたものの取得できずに苦労してきた外国人家族に出会いました。私はこの家族が日本をホームとしたいという強い気持ちを共有していること、そして、永住権を得たら家族同様の信頼関係を継続しようという気持ちを持ってくれたことから、この家族の保証人となり、この家族は無事に永住権を取得しました。一度永住権を取得すると、今度は他の人の保証人になることができます。ですから、**私が起点となって何家族かの保証人になれば、永住権を持つそれぞれが他の永住権を望み、同様に日本をホームとしたい人々に手を差し伸べることができます。**これまで多くの方が私を受け入れ支えてくれたことに対して還元していきたい。一人ができることは非常に限られていますが、私が支援したことがいくつかの連鎖として広がり、つながることで、小さくとも社会へのインパクトにつなげることができたら嬉しいです。



ヨルダン派遣団の仲間と共に（本人前列左から二人目）

## 須賀亜衣子氏プロフィール

1995年 UC Berkeley(政治科学・経済学学士)卒業後、サンフランシスコベイエリアにて難民移民支援 NPO の IIEB、旧日本興業銀行 SF 支店勤務。98 年東京大学法学部（学士編入）卒業後、マッキンゼーアンドカンパニー入社、日系・外資系のクライアントの様々な課題のプロジェクトに従事。2005 年新生銀行入社、2006～2009 年はグループ会社アプラスにてマーケティング部門責任者・常務執行役員として経営に携わる。2011 年マスターカード入社、決済ソリューション導入、キャッシュレス推進、企業提携などを副社長として推進。2020 年からエムスリー株式会社の執行役員・人事責任者。